「物語　スペインの歴史」岩根圀和著　（出版社：中公新書　出版年：2002 年 4 月 25 日）

纐纈崇矩

・目的

スペインといえばとにかく太陽と情熱の国と思われがちである。スペインの人々はみんな陽気で底抜けに明るいと耳にするが、それは誤解である。太陽の国でもなければ情熱の国でもない。人々は親切だが寡黙で不愛想、そして働き者であると述べられている。

「ピレネー山脈を越えるとそこはアフリカ」と穿った言葉を吐いたのは誰であったか。都もあれ、スペインはその昔、太陽の没することなき大帝国であった。しかも中世の時代から濃密な霧は変わることなく立ち込めその厚い垂れ幕の向こうを様々な歴史絵巻が走馬灯のように流れている。八世紀にジブラルタル海域を押し切り雲霞の如くに押し寄せてスペインをたちまちにして支配下に収めたイスラム襲来の章から始まる。その後八百年近くに及ぶ「国土回復運動」、十六世紀のレバントの海に熾烈な戦いを繰り広げた「レバント海戦」。いずれも太陽の没することなき大帝国スペインに去来した大事件ばかりである。かつてはヨーロッパに君臨し、遠く日本まで支配権を伸ばそうとしたほどの国力を誇ったスペインの有為転変を運命づけられた数々の主要事件を選んで切り取っていく。

・第一章　「スペインイスラムの誕生」

イベリア半島への遠征軍を派遣したのは、北アフリカ総監督ムーサの戦略だった。ラクダの飼育を生業としていたベルベル人の若者の元に志願兵の徴募が届く。命の保証はないが衣食住の提供と給金を得られることから総勢七千名の兵士が無数の船に分乗した。実史によると、西暦七一一年、季節は四月下旬であり海上ではまだ肌寒さを感じる時期である。指揮官はムーサの右腕と称され名高いターリック・ブン・ジアード。山脈「ジャバル・アル・ターリック」後の「ターリックの岩」に上陸。西ゴート王国領セウタだけが孤塁を守っていたが、七千の兵士がやすやすと上陸し、二年足らずでスペインを支配下に収めた。

ヨーロッパの果てに位置する野蛮の土地イベリア半島は、エプロ河畔にできた街をイベリアと呼んだことに由来する。スペインの語源はケルト語で「ウサギの国」あるいは「遠い国」の「イスパン」にあたる。スペインは紀元前三世紀ごろローマ帝国政治組織の支配下にあり権力争いに巻き込まれたスペイン庶民がこぞって救いの手を求め別天地イスラム領へ渡る。当時の船は高価な財産であるため丸太を切り出し、しがみついて海を渡るほかなかった。冷たい海水に力尽き亡くなる者が増えたため北アフリカ総督ムーサに窮状を訴え西ゴートからスペインを開放してくれるように願って出た。これが 7000 人の兵士を連れイベリア半島へ出撃する運びとなった原因である。

・第二章　「国土回復運動」

スペインが誕生してからキリスト教王国が着実に勢力を拡大していく中でモハメッド十一世、ボアブディルが即位した。この人物は愚鈍な人だと言われ、グラナダのアルアマ地方へ進軍すると田畑を徹底的に踏みにじり、寺院・家屋を破壊し略奪の限りを尽くす。殺戮の巷と化した村々は、まるで巨大な墓場のごとき廃墟となった。しかし、ボアブディルはカト

リック両国にとって格好の獲物であり、血縁関係から権力の奪還が非常にたやすいものであった。そこでカトリック両国王のフェルナンドはたちまちグラナダを奪ったのである。

フェルナンドはイスラム軍からの攻撃を十年の間持ちこたえる。しかし、籠城戦も食料の不足とともに限界に達しグラナダを開城することとなった。イスラム軍との長い交渉の末グラナダはキリスト教徒の手に引き渡され取り決めを承諾した。

・第三章　レパント海戦

レパント海戦は 1571 年 10 月 7 日に起きたギリシアのコリント湾口のレバント沖でトルコ・オスマン帝国海軍とスペイン・ヴェネツィアの連合軍による海戦である。オスマン帝国の東地中海への進出に対してそれまで消極的な対応をしていたスペイン王国は旧グラナダ王国での隠れイスラム教徒が生活条件の悪化により反乱を起こしオスマン帝国への支援を求めたことで国の安全保障上看過できなくなったことが海戦の原因である。スペイン軍は有能な指揮官ドン・ファン・デ・アウストリアによって指揮された。両軍とも大多数をガレー船（人力でオールを漕いで進む軍艦）が占めており船の配置が勝敗を決すると言っても過言ではなかった。

正午に開戦し、先行する連合艦隊の船がオスマン艦隊を射程距離にとらえて砲撃を開始。これによりオスマン艦隊により多くの損害がでた。午後一時半では中央部隊も大激戦であった。両軍の漕手はキリスト教徒とイスラム教徒の奴隷で構成されていた。オスマン帝国軍は当時の伝染病などもあり物資の搬入ができないことや負傷兵が非常に多かったため士気が低下し戦闘開始一時間半で早々に逃亡をはじめる船があり戦力はほとんどなかった。

結果、オスマン帝国の大敗に終わった。大敗したオスマン帝国艦隊の漕手となっていたキリスト教徒の奴隷一万ニ千人が解放された。この海戦は西欧の軍隊がオスマン帝国に大きく勝利した最初の戦いとなり、ヨーロッパに大きな心理的影響を与え地中海における優位性を獲得し大国スペインの名を広める大きなきっかけとなった。

・終章　現代のスペイン

大国スペインはレパント海戦の後にさらに勢力を広げスペイン無敵艦隊と呼ばれるほど強力な国へと変わっていった。しかし、それに伴い王位継承をめぐりスペイン継承戦争が始まり国内対立から植民地であるオランダ・ナポリ・シチリアを失い決定的な凋落が始まる。

現代のスペインでは、1936 年 7 月から 1939 年 3 月まで国民同士が武器をとって互いに殺しあう不幸な時期があった。これを「スペイン市民戦争」と呼ぶ。スペインに展開してきた現代政治の駆け引きが織りなす複雑な色模様の中で左派の諸政党が協定を結び選挙戦で見事に勝利を収め 1936 年 2 月に共和国政府が誕生した。政府の座を奪われた右派はそれに対し暴動や政治家の暗殺が続き、7 月 18 日の反乱軍蜂起の宣言によりスペイン全土に蜂起の連鎖反応が起こりスペイン市民戦争が勃発した。このことから著者はスペインの内情は不安定であると捉え内戦により形作られた悲劇の国であると述べている。

「物語　スペインの歴史」岩根圀和著　（出版社：中公新書　出版年：2002 年 4 月 25 日）

纐纈崇矩

・まとめ

今まで見てきたスペインの重要な事件の中で数多くの死者が出ていることを忘れてはならない。最初に述べられていたようにスペインは太陽の国でもなければ情熱の国でもない。数多くの戦争や内戦を繰り返しやられたやり返す文化を芽生えさせた悲劇の上にある国であると述べ、これは現代のスペインの中でも見えるものである。

スペイン市民戦争では政治権力争いが原因で暴動・暗殺が起き国内全域を巻きこむものになった。この歴史が近年ではテロリズムという形となってスペインという国に襲い掛かっている。政府独裁政治への不満が「バスク祖国と自由」を挙げる分離主義過激組織であるETA を生み出し首相暗殺にとどまらず非人道的に殺害を繰り返す事件を勃発させてしまった。2000 年に入ってからの犠牲者は 766 人に及ぶ。自身たちの主義主張に反対する政治家、治安警察や軍人、そのほかに自分に不都合な邪魔者を次々と抹殺した。さらに、反政府デモを行う団体の中にテロリストを英雄視して集会で公然と賞賛演説をする議員もいるのである。現代のスペインでは ETA がテロの回数と犠牲者の数を着実に伸ばし、スペインが悲劇の国であることを思い出させると述べられている。

著者は飽きることなく繰り返される王朝の交代劇や宮廷に渦巻く陰謀、あるいは文化の織りなす綾錦の歴史を記述するのではなく興味深い大きな事件のいくつかを取り上げて物語ることで、スペインの悲しい歴史を理解させたかったと述べている。この悲しい歴史から現代の情勢と結び付けスペインという国の実態が見て取れる。